

# 「友達」をめぐる保育内容（人間関係）と生活科、道徳、特別活動のカリキュラムの接続とその課題

— 2017年改訂学習指導要領・幼稚園教育要領の検討を中心に —

水 引 貴 子<sup>1)</sup>      歌 川 光 一<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 日本児童教育専門学校

<sup>2)</sup> 昭和女子大学

## Articulation over “friends” between the Area “Human Relationships” in the Kindergarten education and “Special Activities”, “Moral Education” and “Life Environment Studies” curriculum in the Elementally School, and Their Issues

— Focusing on studying in the “Next Elementally School Course of Study” and “Next Kindergarten education guidelines” —

Mizuhiki Takako<sup>1)</sup>      Utagawa Koichi<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Japan Juvenile Education College

<sup>2)</sup> Showa Women’s University

**要旨：**本研究は、本来、個人的な人間関係の選択の問題とも言える「友達」について、学校教育がどの発達段階でどの程度介入すべきかを再検討し、体系的なカリキュラムを構想する必要があるという問題意識に基づいた基礎作業として、「友達」をめぐる保育内容（人間関係）と生活科、道徳、特別活動のカリキュラムの接続とその課題について、2017年改訂学習指導要領・幼稚園教育要領の検討を中心に明らかにすることを試みた。

保育内容（人間関係）の内容は、生活科、道徳、特別活動に分散されながらも接続され、これらの領域、教科の関連性について十分な配慮が確認された。

しかし、特に生活科にみられるように、教育課程の中で関わりを持つ級友、その中でも特に仲のよい友達、「地域の子供」として学校の教育課程外で関わる友達の存在の異同については特に断りのないまま、その関係性作りが焦点化されている状態も課題として浮き彫りとなった。

**キーワード：**友達、2017年改訂学習指導要領・幼稚園教育要領

### 1. 問題の所在

内閣府が世界11カ国の青年（18～24歳）を対象に行っている『世界青少年意識調査』の調査項目「学校に通う意義」（複数回答可）について、日本では、「一般的・基礎的知識を身につける」「学歴や資格を

得る」「専門的知識を身につける」を差し置いて、「友達との友情をはぐくむ」と回答する青年が最も多い（第8回の2007年調査では65.7%）ことがよく知られている。「友達」は、2000年代以降の子ども・若者に関する社会学研究において、その定義が曖昧

で不透明であるがゆえに同調圧力や過剰な敏感さをもたらすものとして捉えられ、友達関係をめぐる緊張や違和感が「友だち地獄」「スクールカースト」等で表現されるようになっていく<sup>1)</sup>。

近年の子ども・若者の人間関係の希薄化を問題視し、学校教育の問題として受け止めつつ、集団への適応や自己肯定感、生活満足度等の向上のために友達関係の重要性を唱える<sup>2)</sup>ことは容易なことだが、既述の社会学研究が示唆するように日本の子ども・若者がそれに対して過敏になりすぎていることもまた社会問題であるとすれば、いずれは個人的な人間関係の選択の問題となっていく「友達」について、学校教育が子どものどの発達段階でどの程度介入すべきかを再検討し、体系的なカリキュラムを構想する必要があるだろう。

本研究は、このような問題意識に基づいた基礎作業として、「友達」をめぐる保育内容（人間関係）と生活科、道徳、特別活動のカリキュラムの接続とその課題について、2017年改訂学習指導要領・幼稚園教育要領の検討を中心に明らかにしようとするものである。

幼稚園、保育所、認定こども園等から小学校、義務教育学校への進学は、多くの児童にとって友達関係が校種をまたぐ初めての経験となる。「友達」をめぐる体系的なカリキュラムを構想する上で、人間関係形成に重要な関わりをもつ保育内容（人間関係）、生活科、道徳、特別活動といった領域、教科（2節において確認）における「友達」の取り扱いを検討することは必要不可欠な作業と言える。

## 2. 先行研究

本研究に関連する先行研究として以下を挙げることが出来る。

伊勢<sup>3)</sup>は、保・幼・小の連携を意識した保育内容の実践を捉えなおすことを意図して、幼稚園教育要領の保育内容である「人間関係」が小学校教育の指導内容にどのように関連付けられているのか小学校学習指導要領との対応を検討した。それによれば、「人間関係」の要素は小学校教育におけるすべての区分に万遍なく広く移植されていることが確認できた。また、小学校での実践を保育所で実施することの有効性が認められたため、小学校での実践を手掛

かりに保育内容の実践を捉えなおす作業には意義があることが導かれた。

また、「人間関係」と生活科の関係性の整理の前に、指導要領と解説から生活科の指導内容や方法についてもまとめている<sup>4)</sup>。生活科のキーワードは「具体的な活動や体験」「繰り返し」「気付き」であった。これらを踏まえて、保幼小の連携モデルに「低学年担任が独自に構築する地域住民との人脈作り」と「小学校の校務分掌に相談部を設けて外部との渉外をサポートする仕組みづくり」を提案した。

中島<sup>5)</sup>は、子どもたち、保育者が「お友達」「仲間」をどのような意味で捉えており、入園からの一年間でどのように変容するのかについて、参与観察とそれらの記録からの読み取りを試みた。それによれば、子どもが語る「お友達」には、①「知っている子」あるいは「仲良しの子」②「同じクラスの子」③「ごっこ遊びの中の関係」の3種類で、保育者のそれには、(1)「仲良くすること、配慮することが必要な相手」(2)「同じクラスの子」の2種類があることを確認した。また、子どもが語る「仲間」には3種類あり、(1)「一緒に遊びを共有する者同士」(2)「同じ」(3)「戦いごっこでの味方」である一方、保育者が語る「仲間」には2種類で、(1)「一緒に遊びを共有する者同士」(2)「保育者が意図的に作る小グループ」であった。変容については、「お友達」から「仲間」へと口にする子どもが増える。これは、単に仲良しの子がいるだけではなく、一緒に好きな遊びを共有できることが幼稚園生活の中で重要になっていったためと推察された。

松延ら<sup>6)</sup>は、年齢や時期により「友達」とはどのような関係を指すものかを明確にしていかなければならないという問題意識のもと、本稿では、幼児自身がグループや学級全体をどのように捉えているかを、聞き取り調査によって明らかにした。園児個人の友達の捉え方の差異は、特定の友達と一緒にいることを重視するか（その子となら活動は何でもよい）、自分の興味ある活動を重視するか（その時その時で興味のある遊びをしているグループに加わる）によるものである。また学級全体の捉え方においても、仲の良い友達関係を重視する子はそれ以外の他児には関心が低いために学級全体の関係をあまり捉えておらず、反対にそれほど特定の子どもにこだわ

らない子は学級全体の関係について把握している。

それに続く研究では、個別の事例を検討した<sup>7)</sup>。「友達」の種類にもいくつかあり、いつも一緒にいるような「仲の良い友達」以外に、大勢で遊ぶときに一緒にいる友達、仲の良い友達が不在の時に抛り所となる友達、仲の良い友達とは別の遊びをするときの友達といった捉え方がある。2008年の教育要領には「友達」以外に「他の幼児」という表記もあり、「他の幼児」とかかわっていく中で関係が深まり「友達」へ変わっていく。つまり、「友達」とは目に見えてそこに存在するという意味で用いるのではなく、自分と相手にある「関係性」のことを指すもの、あるいは、その関係性と相手の存在を大きく含めて指すものであることから、「人間関係」を考えると、関係の深まりと関係の広がりという二つの視点で見ることができる。

これらの研究から、保幼小連携を視野に「友達」について考察する上で中心となる保育内容（人間関係）、生活科、道徳、特別活動といった領域、教科に着目する。

### 3. 現行幼稚園教育要領と2017年改訂幼稚園教育要領の「友達」表記の比較<sup>8)</sup>

現行の幼稚園教育要領（以下、現行版）と2017年改訂の幼稚園教育要領（以下、改訂版）において「友達」表記について検討した。まず、「友達」の頻出回数を比較すると、現行版では11か所、改訂版では17か所と、改訂版の方が多い。最頻出箇所は、両者とも第2章の5領域に関する「人間関係」の内容（1）（5）（7）（8）（10）（11）項目であり、同一の文言である。

「健康」では内容の2項目で見られる。（1）の「先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する」では、乳幼児の安定感がある行動は、先生や友達といった身近な人との信頼関係の上に成り立っているということを示し、（5）の「先生や友達と食べることを楽し」むでは、食事を楽しむことは、先生や友達との安定した関係の中で可能となることを示していると考えられる。

また、5領域のうち唯一「言葉」においては、両者とも内容だけではなく、ねらいにも（3）「（略）先生や友達と心を通わせる」とある。乳幼児が言葉

を身に付け使用できるようになることは、身近な人物と心を通わせるために行われるべきであることを表している。

一方、表記がない領域は現行版、改訂版共に「環境」と「表現」である。しかし、改訂版の第1章「第2幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」」の「表現」領域にあたると思われる（10）には「（略）友達同士で表現する過程を楽しんだりし、（略）」という表記があることから、「表現」領域においても充実した活動を展開させるために「友達」関係が重要であると解釈できる。

### 4. 現行学習指導要領と2017年改訂学習指導要領の「友達」表記の比較<sup>9)</sup>

現行の学習指導要領（以下、現行版）と2017年改訂の学習指導要領（以下、改訂版）において「友達」表記について検討した。

まず、「友達」の頻出回数を比較すると、現行版では6か所、改訂版では28か所と、改訂版の方が多い。最頻出教科は、体育であり（18か所）、「考えたことを友達に伝えること」の文言が大半を占めている。

生活科では「第2各学年の目標及び内容」の内容で見られる。（1）に「学校生活に関わる活動を通して、学校の施設の様子や学校生活を支えている人々や友達、通学路の様子やその安全を守っている人々などについて考えることができ、学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが分かり、楽しく安心して遊びや生活をしたり、安全な登下校をしたりしようとする。」とあり、現行版と同様の取り扱いとなっている。

「道徳」においては、「第2内容」の「B主として人との関わりに関すること」において、「[友情、信頼] [第1学年及び第2学年] 友達と仲よくし、助け合うこと。[第3学年及び第4学年] 友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと。[第5学年及び第6学年] 友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと。」とある。これは2015年の学習指導要領一部改正時に加わったものである。

「特別活動」については、現行版、改訂版共に「友達」への言及はないが、解説編での言及が見られる



ため、6 節において確認したい。

## 5. 2017年改訂幼稚園教育要領における「人間関係」領域での「友達」の取り扱い<sup>10)</sup>

既述のように、改訂版における「人間関係」領域の「友達」の取り扱いについて、詳しく見ていく。両者の第2章の「人間関係」の内容において、「友達」が表記されていた項目は共通しており、以下の通りである。

- (1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。
- (5) 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。
- (7) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。
- (8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。
- (10) 友達との関わりを深め、思いやりをもつ。
- (11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。

「人間関係」領域では「友達」とのかかわりが重要であるため、表記が最多であることは当然である。「健康」や「言葉」領域における「友達」の取り扱いと比較すると、「健康」や「言葉」では子どもの活動が充実したものとなるように友達関係が基盤として位置付けられているが、一方「人間関係」では、友達と過ごすことそのものが目的となり、楽しむことに重きが置かれている。

また、今回の改訂で初めて登場した第1章の「第2幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」」の10項目においても、以下のように「友達」表記が5項目にわたって7箇所みられる。

### (3) 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

### (4) 道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

### (6) 思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

### (9) 言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

### (10) 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

「第2幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」」は全10項目あり、それぞれの項目が5領域に対応していると捉えることができる。(3)と(4)は「人間関係」、(6)は「環境」、(9)は「言葉」、(10)は「表現」の領域に対応しており、やはり「人間関係」領域において「友達」の役割が大きいことが確認できた。

## 6. 2017年改訂学習指導要領における生活科、道徳、特別活動での「友達」の取り扱い<sup>11)</sup>

本節では、2017年改訂学習指導要領の生活科、道徳、特別活動における「友達」の取り扱い方について、解説にも触れながら検討していきたい。

第一に生活科において、解説のみで「友達」に触れている内容が、「(3) 地域に関わる活動を通して、地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考えることができ、自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、適切に接したり安全に生活したりしようとする。」であり、「ここでいう地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々」とは、自分の家や学校の周りの田や畑、商店やそこで働く人、友達の家やその家族、公園や公民館などの公共施設やそこを利用したり働いたりしている人、幼稚園・認定こども園・保育所や幼児や先生、近隣の人、子供会の人、目印にしている場所や物、遊べる川や林、自分や家の人がよく通る道などである。」として友達に言及している。

また、「(4) 公共物や公共施設を利用する活動を通して、それらのよさを感じたり働きを捉えたりすることができ、身の回りにはみんなで使うものがあることやそれらを支えている人々がいることなどが分かるとともに、それらを大切に、安全に気を付けて正しく利用しようとする。」に関わって、「この内容の学習をきっかけとして、授業以外で、友達や保護者と公共施設などを利用した経験を共有し合えるように、朝の会のお知らせや掲示板などで情報発信する場を設けることなども、児童の学びを広げ、実生活とつなげる取組として効果的である。」として友達に言及している。

生活科に関して、上記の「地域の子供」としての言及以外は、級友としての「友達」についてであるが、他教科、活動と比較した場合、学校外の「友達」との関係を具体的に記述している点で特徴的である。

第二に道徳において、既述の「友情、信頼」について、「友達関係における基本とすべきことであり、友達との間に信頼と切磋琢磨の精神をもつことに関する内容項目である」とし、その概要として、「友達は家族以外で特に深い関わりをもつ存在であり、友達関係は共に学んだり遊んだりすることを通して、

互いに影響し合って構築されるものである。また、世代が同じ者同士として、似たような体験や共通の興味や関心を有することから、互いの考え方などを交え、豊かに生きる上での大切な存在として、互いの成長とともにその影響力を拡大させていく。」と言及している。

また第1学年及び第2学年の指導の要点として、「この段階においては、幼児期の自己中心性から十分に脱しておらず、友達の立場を理解したり自分と異なる考えを受け入れたりすることが難しいことも少なくない。しかし、学級での生活を共にしながら一緒に勉強したり、仲よく遊んだり、困っている友達のことを心配し助け合ったりする経験を積み重ねることで、友達のよさをより強く感じるようになる。指導に当たっては、特に身近にいる友達と一緒に、仲よく活動することのよさや楽しさ、助け合うことの大切さを実感できるようにすることが重要である。また、友達とけんかをして、友達の気持ちを考え、仲直りできるようにする。そのためには、友達と一緒に活動して楽しかったことや友達と助け合ってよかったことを考えさせながら、友達と仲よくする大切さを育てていくようにする必要がある。」としている。

このように道徳では「友達」との関係や行動を具体的に示している点で特徴がある。

第三に特別活動において、「発達的な特質を踏まえた指導」の中で、低学年は「入学当初においては、幼児期の自己中心性がかなり残っており、学校の中の児童相互の関係は、個々の児童の集合の段階にある。さらには、言うてよいことと悪いことについての理解はできるようになるが、感情的、衝動的な言動が多く、入学期に小学校生活や集団生活にうまく適応できなかったり、このことによって授業が成立しにくい状況が生まれたりするなどの問題も生じてくる」としている。しかし、「幼稚園教育要領の『人間関係』の領域などの教育や社会性を育む幼児期の教育では、友達との関わりを通して、互いの思いや考えなどを共有し、実現に向けて、工夫したり、協力したりする充実感を味わいながらやり遂げることもできるようになっている。」としており、保幼小連携のあり方が具体的に提示されている。

内容としては、学級活動の「(2) 日常の生活や学

習への適応と自己の成長及び健康安全 イ よりよい人間関係の形成」の内容において育成を目指す資質・能力の例として、「学級や学校において互いのよさを見付け、違いを尊重し合い、仲よくしたり信頼し合ったりして生活することのよさや大切さを理解すること、互いの個性を尊重し合う人間関係を形成することができるようにすることなどが考えられる。また、友達と関わる過程を通して自己理解を深め、互いに協力し合って温かな人間関係を形成しようとする態度を養うことなどが考えられる。具体的な指導内容としては、例えば、友達と仲よく、仲直り、男女の協力、互いのよさの発見、違いを認め合う、よい言葉や悪い言葉、友情を深める、などが考えられる。」と級友との関係作りに触れている。ここでは、「教師は、例えば、就学前教育における人間関係に関する内容や道徳科の『主として人とのかかわりに関すること』等と関連させて指導をすることが望ましい。」とあり、保育内容（人間関係）や既述の道徳の「友情、信頼」との関連性を示している。

また、同じく学級活動「(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現 ア 現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成」に関して、「指導に当たっては、学級や学校生活における不安や心配の解決のための目標を立てて行動することにより、現在の生活をよりよくすることの大切さについて理解したり、学級での話し合いを通して、友達の意見などを参考にしながら自己のよさや実現できそうな目標を具体的に考えたりすることができるようにする。」と友達に言及している。

このように特別活動については、学級活動を中心とする級友との接触を通じた人間関係力育成の文脈において友達に言及している。

## 7. まとめと今後の課題

5、6の新版学習指導要領、幼稚園教育要領における「友達」の取り扱いを合わせて観察すると、保育内容（人間関係）の内容は、生活科、道徳、特別活動に分散されながらも接続され、これらの領域、教科の関連性についても十分配慮がなされている。

ただし、特に生活科においてそうであるように、教育課程の中で関わりを持つ級友、その中でも特に仲のよい友達、「地域の子供」として学校の教育課程

外で関わる友達の存在の異同については特に断りのないまま、その関係作りが焦点化されている状態にある。この「友達」をめぐる段差が学校や教師のどのような働きかけによって乗り越えられているのか、および友達関係に関する保護者の意識<sup>12)</sup>や保護者間の関係と子どもの友達関係の接続の関連等の実態を踏まえた接続カリキュラムの可能性に関しては稿を改めて検討することとしたい。

## 〈注〉

- 1) 鈴木翔 (2015)「友だち — 「友だち地獄」が生まれたわけ —」本田由紀編著『現代社会論 — 社会学で探る私たちの生き方』有斐閣、pp.79-101
- 2) 榊原は、社会の変化に伴う問題のうち、子どもの人間関係力低下の原因は①人間関係における豊かさの喪失②直接経験の不足③仲間関係の崩壊であることを明らかにし、これらの解決には保育内容「人間関係」において地域や家庭との連携、協同と試行錯誤、一人一人を生かした集団づくりが教師に求められていることを確認している。榊原博美 (2012)「現代社会の問題と保育内容「人間関係」の課題」『名古屋柳城短期大学研究紀要』第34号、pp.149-156
- 3) 伊勢正明 (2014)「保育内容「人間関係」と小学校教育の内容の関連に関する一考察」『帯広大谷短期大学紀要』第51号、pp.87-97
- 4) 伊勢正明 (2016)「生活科の指導内容・方法が示す保幼小連携のモデル」『帯広大谷短期大学紀要』第53号、pp.67-76
- 5) 中島寿子 (2000)「幼稚園生活の中で幼児は「お友達」「仲間」をどのように捉えているか — 二年保育年少組の一年間の記録から —」『愛知教育大学研究報告』49号、pp.133-142
- 6) 松延愛美、金子亜由美、小谷宜路 (2011)「5歳児を対象とした「友達との関係」に関する聞き取り調査 — 個人・グループ・学級全体を幼児はどのように捉えているか —」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第10号、pp.51-58
- 7) 松延愛美、金子亜由美、小谷宜路 (2012)「5歳児を対象とした「友達との関係」に関する聞き取り調査 — 個人・グループ・学級全体を幼児はどのように捉えているか — (第二報)」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第11号、pp.47-54
- 8) 本節の引用は全て文部科学省 (2008、2017)『幼稚園教育要領』による。
- 9) 本節の引用は全て文部科学省 (2008、2017)『小学校学習指導要領』による。
- 10) 注8)に同じ。
- 11) 本節の引用は全て文部科学省 (2017)『小学校学習指導要領解説』による。
- 12) 椋田は、クラス編制や教師が遊びや友達関係への支援を行うことによってそれらを充実させることが、保護者の、

入学後の児童の友達関係に関する不安や適応への不安の解消へと繋がると指摘しており、示唆的である（椋田善之（2014）「幼稚園から小学校の移行期における保護者の子どもへの期待と不安の変容過程 ― 入学前と入学後の保護

者へのインタビューを通して ―」『東京大学大学院教育学研究科紀要』53、pp.233-246）。

受付日：2017年8月15日

